

読書が習慣化されると、学力のみならず、徳性が顕著に養われる。徳性とは、思いやりや感謝、尊敬、利他心、抑制といった人間だけがもつ高次元の心の働きである。読書の効果により、これらが育っていく。

映画を観ることがある。小説が原作となっているものがある。映画を観てしまうと、それだけでその作品を理解したつもりになってしまう。映画だけでなく原作を読むべきである。例えば、『ハリー・ポッター』がある。原作を読めば、もっと映画以上にイメージが広がる。映画とはまるっきり違った印象を受ける。映画がつくり出すイメージの中に押し込められたものを観て満足してしまうのは不幸である。本を読めば、無限の解釈ができる面白さに気づくべきである。

今の若い人たちの中には、本を読めない人が増えているかもしれない。脳に本を読む体力がない。特にスマホ社会になってからは、集中力が30秒も続かない人が多くなっている。スマホの使い方を見ていると、ゲームをやっていると思ったら、LINEでメッセージのやり取りをし、そうかと思えばユーチューブを見ている。一つのことにじっくり集中できないため、本を手にしても辛くなってすぐに投げ出してしまうかもしれない。

本を読むという行為は、けっこう集中しないとできるものではない。ある程度の分量が記憶に残っていないと文脈をつかめない。若い人の中には、これができない人が多いのかもしれない。短い文章を読むところから再教育のようなことをしていかなないとむずかしい。

読み聞かせをすると、子どもたちは一所懸命に聴く。だが、それで読書をする習慣が身に付くかというと、そうでもない。読み聞かせの唯一の欠点は、文字を読む力が育たないことである。したがって、幼児期のうちに、いかにして自分で文字を読む力を養ってあげるかが重要である。

何でも易しくかみ砕いて教えようとして逆に子どもの成長の機会を逸してしまうことがある。子どもは、易しいことはすぐにつまらなくなる。幼稚園に、漢字が読める園児がいる。「給食試食会」「親子遠足」「安全点検」など、読んでしまう。漢字は、目で見える言葉である。書けなくてもいいから一つ読めるようになれば、語彙が一つ増え、その分、思考力も高まる。

読書をする頭の中で、いろいろなイメージが膨らむ。それは、未来に思いを馳せるいい訓練になる。読書をすれば、先人の知恵にふれることができる。そして、そこから新しいものを生み出していける。きっと、人類はこれまで、そうやって未来への思いを馳せてきたからこそ発達してきたのではなかろうか。

読書は、自分を知るという大切な効能も備えている。本を通じて古今東西の優れた人物とふれ合い、対話することを通じて自分を知ることができる。子どもたちが、読書を通じて様々な言葉を自分たちの中に入力していくと、だんだんとその言葉に宿る命が、子どもたちをコントロールし始めていくようになる。子どもたちは、入力された言葉を実現しようと心を働かせてしまう。よい言葉をたくさん入力した子どもは、それを実現しようと心が働く。結果として、よい生き方が実現できるようになる。読書、すなわち言葉は、その人の人生を切り拓く力をもっている。